

# 更級への旅

152

いる女性に、「桜の花は姨捨山の月より心を慰めるものですよね」というような慰め、お見舞いの気持ちを詠んだのです。

二人の間でやりとりされたこれらの歌では「慰め」「姨捨山の月」というフレーズがポイントになっています。これらの和歌は、当地の名を世に知らしめることになった古今和歌集収載の「わが心なくさめかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（この歌についてはシリーズ30、60など参照）を踏まえていることが濃厚にうかがえます。老人ほどに年をとっているわけではない若者の二人なのに、姨捨山をテーマにしたこの歌が、お互いの気持ちをやり取りする手段の歌として共有されているところが面白いと思います。花と言えば月、その月の名所と言えば「さらしな・姨捨」という美意識が世代を超えて当時の都人の間にあったことがうかがえます。

シリーズ51で、「更級日記」作者である菅原孝標女にとつて、当地に旅をしたことのある能因法師は、更級日記という物語の構想を固める大事な情報を提供した人だった可能性があることを書きました。仮説の上に仮説を載せませんが、「さらしな」と菅原孝標女に尋ねられた能因法師は、喜んでどうかと想像しました。そう考える理由は、能因法師が出家させた事情をうかがわせる和歌が、「さらしな・姨捨」に関係したものであるからです。

## ▽重い病の女性と交際

その和歌は能因法師（988〜1050?）が晩年に自分が作った歌を中心に編んだ歌集「能因集」の中にあります。下にそれに該当する和歌を列挙しました。研究者によると、これらの歌は能因法師が26歳のころ、恋人の女性が重い病にかかってからやりとりされた歌だそうです。同歌集には全部で約250の歌が載っているのですが、ほぼ全部が詠んだ時間順に並べられ、それぞれの歌の前には歌が作られた経緯や事情も書き添えられていることから、能因法師の人生の歩みの軌跡もうかがうことができます。

ある所にある女、桜花の散るを見ても思へるさまにてかくいふ

うき身をばなくさめつるに桜花

いかせにせよとかかくは散るらん

これを聞きて

思ふことなぐさめけるは桜花

をばすて山の月にますかも

女、かえし

をばすての山をば知らず月見るは

なほ哀れます心地こそすれ

また返し

月はまたなほ哀れと物を思ふなり

つれなき人は見ぬやあるらん

## 一番右の「うき身をばなくさめつるに桜花いかにせよとかかくは散るらん」は、その女性が能因法師に送った歌で、病の身を慰めるのは桜の花だが、どんなにしても散ってしまうのが悲しい」というような病身の心を打ち明けたものです。これに対して能因法師はそ

の左隣の「思ふことなぐさめけるは桜花をばすて山の月にますかも」という歌を作った女性に送りまじう意味なのか私にはよく分かりません。病気が治らずにふさぎこんで

はなほ哀れます心地こそすれ」と歌を返します。「さらしな」の姨捨山には行ったことはないが、月を見ると、よけい悲しい気持ちになるというのです。それで能因法師はさらに一番左の歌「月はまたなほ哀れと物を思ふなりつれなき人は見ぬやあるん」を作り、女性に送りまじう意味なのか私にはよく分かりません。

## 更級日記作者の質問に熱く答えた？

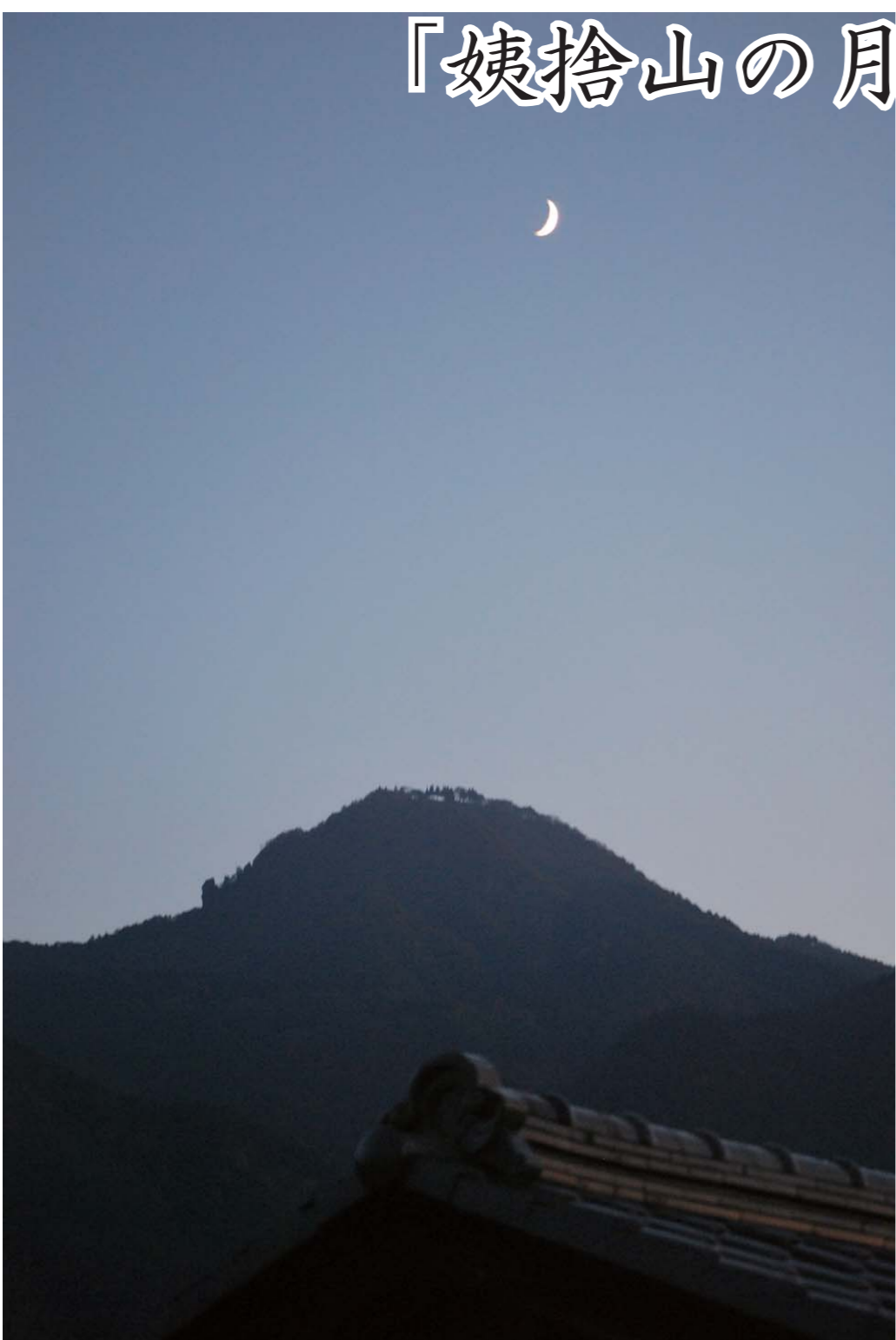
能因法師が出家して和歌の道に人生を捧げることを決める際に、歌の大きなテーマになった「さらしな・姨捨」です。そのテーマに関連した質問を能因法師が受けたとすれば、熱く語らずにはいられなかつたのではないのでしょうか。

### ▽出家の原点の地？

シリーズ51で触れたように、能因法師にとつて菅原孝標女は、自分の歌の師と仰いだ藤原長能の姪っ子なので、よけい親しみを感じて話したのではと想像しました。菅原孝標女との出会いは人生の晩年期と考えられるので、能因法師は『さらしな・姨捨』は、私の出家の原点の歌枕の地でもあった」と振り返り、旅の思い出や歌枕としての「さらしな・姨捨」論を披露したのではないかと。本当のところは分かりません。仮説の上に仮説を重ねています。

今号で参考にした資料は、「能因集注釈」（川村晃生著、貴重本刊行会発行）と「撰関期和歌史の研究」（同、三弥井書店発行）、さらに「隠通歌人の源流」（奥村晃作者、笠間書院発行）です。上の写真は姨捨山の別名がある冠着山。さらしな堂事務所の前で2009年10月23日に撮影したものです。秋の夕闇の中に三日月が浮かんでいました。

## 「姨捨山の月」を詠んだ平安貴族の出家和歌



発行 二〇二二年十二月二十九日  
編集 さらしな堂

（代表・大谷善邦）

〒三三九・〇八一三

長野県千曲市大字若宮一八四・六  
（旧更級郡更級村）